

めぐみイエス・キリスト教会

2026年2月8日(日)第二主日礼拝

午前10時より

週報「通算第794号」



2026年標題聖句

ヨハネの福音書14章1節～2節

《「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、また私を信じなさい。私の父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、私は場所を備えに行くのです。」(新改訳第Ⅱ版)》

礼拝 毎週日曜日 午前10時～11時

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌282「見ゆるところによらず」p. 450

【交読文】 No.4 詩篇第18篇(抜粋) p. 881

【賛美Ⅱ】 新聖歌434「語り告げばや」 p. 700

【使徒信条・主の祈り・前回説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナル曲「キリスト賛歌」

【聖書朗読】 ルカの福音書12章13節～21節(新約p. 141)

【礼拝説教】 「ある金持ちのたとえ」

【聖餐式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌165「栄光イエスにあれ」 p. 235

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

※本日の聖書箇所(ルカの福音書12章13節～21節)

12:13 群衆の中の一人がイエスに言った。「先生。遺産を私と分けるように、私の兄弟に言って下さい。」

12:14 すると、イエスは彼に言われた。「いったいだれが、私をあなたがたの裁判官や調停人に任命したのですか。」

12:15 そして人々に言われた。「どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほど持っていても、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

12:16 それからイエスは人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。」

12:17 彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』

12:18 そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。』

12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。」』

12:20 しかし、神は彼に言われた。『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

12:21 自分の為に蓄えても神に対して富まない者はこの通りです。」

●ポイント「ある金持ちのたとえ」の続きと考えられている話とは？

※ルカの福音書16章19節～26節「伝承ではダイブス」(新約p.151)

16:19 ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

16:20 その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。

16:21 彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた。

16:22 しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懷に連れて行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。

16:23 金持ちが、よみで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懷にいるラザロが見えた。

16:24 金持ちは叫んで言った。『父アブラハムよ、私をあわれんでラザロをお送り下さい。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすようにして下さい。私はこの炎の中で苦しくてたまりません。』

16:25 するとアブラハムは言った。『子よ、思い出しなさい。おまえは生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている。

16:26 そればかりか、私たちとおまえたちの間には大きな淵がある。ここからおまえたちの所へ渡ろうとしても渡れず、そこから私たちの所へ越えて来ることもできない。』

◎先週のメッセージ【人々の前で】

《「あなたがたに言います。誰でも人々の前で私を認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。」

「人々の前で私を認める」ということはどのようなことでしょうか。十二使徒たちにとって、主の弟子であることを公言することであり、私たちは、神の子どもである自分の立場を明確にすることだと考えます。

主イエスが言われた言葉の真意を、やがてシモン・ペテロは身を持って体験することになります。彼は、主イエスが預言された通り、大祭司アンナスの家の庭において、主を三度知らないと否定します。

しかし、この失敗を通して、後にペテロは、最高法院の議会において聖霊に満たされ、生涯最高のメッセージを語ることになるのです。『翌日、民の指導者たち、長老と律法学者たちは、エルサレムに集まった。大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロと、大祭司の一族も皆出席した。彼らは二人を真ん中に立たせて、「おまえたちは何の権威によって、また、誰の名によってあのようなことをしたのか」と尋問した。その時、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。』

さて、私たちは、誰なのでしょう。使徒ヨハネは、「私たちは神の子どもである」ことを明確に述べています。救い主なる主イエス様の十字架と復活を信じた私たちは、創造主なる神様を「お父様」と呼ぶことが出来るようになりました。私たちの内側には聖霊様が住んでおられます。それこそが、「神の子ども」とされた確固たるしるしです。

私たちの国籍は天にあります。この世界は仮りの住まいなのです。現在、日本において、神の子どもであることを、公言しにくい状況に置かれていることも事実です。なぜなら、異端やカルト教会が数多く存在しているからです。しかし、そのような状況下であっても、私たちは「旗印」を明確にしなければなりません。私たちは、もはやこの世の者ではないのです。その認識の上に堅く立つ必要が有るのです。》

◎お知らせ

※次回礼拝は、2026年2月15日(日)午前10時から、通常通りです。